群教セ	G14 - 01
	平16.220集

様々な人と関わり
自己の生き方を見つめ直す児童の育成

―お年寄りとの交流活動「福島発ありがとう便」を通して―

特別研修員　大島　正幸（甘楽町立福島小学校）

《研究の概要》

本研究は総合的な学習の時間において、様々な人と関わり、自己の生き方を見つめ直す児童の育成を目指す実践的な研究である。お年寄りとの交流活動や、課題追究の中で福祉に携わる人と積極的にふれあいながら、その生き方に接していく。そして、課題別にまとめた各班の成果を効果的に共有し、「お年寄りが幸せに暮らせる社会」について提案する中で、自己の生き方を見つめ直す児童の育成を目指す。

【キーワード：教育課程　総合的な学習―小　お年寄り　課題追究　自己の生き方】

Ⅰ　主題設定の理由

本校６年生（男子 28 名　女子 20 名　計 48 名　２学級）の児童はこれまで、生活科の絵本作り（２年：生活科)、二分の一成人式（４年：総合的な学習の時間)、食農体験（５年：勤労生産活動）などを通し、自分を支えて来てくれた「人」や「地域」「自然」に気づき、自己を見つめる活動をしてきた。しかし、直接自分と関わりの多い「人」や、直接的な利害を伴う事柄についての思いは強いが、そうでない「人」や事柄においては、その意識は弱い。小学校生活の締めくくりのこの一年は､自分と他との関わりについての学びの姿勢を高めていくとともに、今まで以上に自己の生き方を見つめ直せる活動を深めていくことが大切である。

核家族化・高齢化が進んでいる近年、本校区においても例外ではなく、居住年齢層の高齢者の占める割合は年々高くなってきている。毎年、福島校区のお年寄りに書いている「敬老の日」のお手紙の数は年々増加しており、反対に手紙を書く児童の人数は減少している実態は、児童自身が実感している地域の高齢化社会の現実である。このような地域社会の中で、異年齢の者同士が理解し合いながら共に生きることに向けて、自分から働きかけていけるようにしたり、遠い未来ではあるが数十年後の自分や社会はどのようになっているのかも考えたりしながら、高齢者に対する正しい認識と共感的な理解、協調して共に生きていこうとする態度を身に付けていくことは、この地域の中で生きる子どもたちにとって必要不可欠な課題である。

そこで、高齢者の健康・安全・福祉などに携わりながら、地域社会で生きている様々な人との交流を通しながら、共によりよく生きていこうとする態度が図れるようにしたい。お年寄りとの交流の「福島発ありがとう便」の活動で、身の回りの人や事象に対して、感謝や尊敬の念を高めていきながら、自己の生き方を見つめ直す学習を行っていきたい。

Ⅱ　研究のねらい

総合的な学習の時間の単元「福島発ありがとう便」において、お年寄りや、お年寄りを取り巻く様々な人との交流活動を通して、それぞれの生き方に触れ、思いを感じていけば、児童の人に対する感謝の気持ちが喚起され、自己の生き方を見つめ直す児童が育成されることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　課題をつかむ過程において、ゲストティーチャーや、身近なお年寄りへのインタビュー活動の中からお話を聞いたり、特別養護老人ホームのお年寄りと交流を深めたりすることで、お年寄りへの感謝の思いが深まり、「お年寄りが幸せに暮らせる社会」について関心を高めていけるであろう。

2　グループの課題を追究する場面において、お年寄りや老人福祉に携わる人たちや、お年寄りに配慮しながら仕事をしている人たちに対して、積極的な交流の場を設定し、その人たちの生き方を感じていける活動を行っていけば、より意欲的な追究活動となり、「お年寄りが幸せに暮らせる社会」への思いや願いが高まっていくるであろう。

3　まとめる・広げる過程において、班の成果をサンクスレポートにしてまとめ、他の班の成果を自分たちの班の成果と比較・関連しながら、お年寄りを取り巻く環境について深く情報を共有化することにより、「お年寄りが幸せに暮らせる社会」のために、今の自分にできることや、これから実践していきたいこと、さらにはお年寄りと共によりよく生きられる未来を想像することなど、自己の生き方を見つめ直すのに役立つであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　「様々な人と関わり」を体験させるための工夫

ア　「ゲストティーチャー」からのお話

他教科（社会科）との関連から、地域在住の高齢者より「戦争の時代のくらし」と題して戦争体験や当時の生活体験をお話していただく機会を設ける。そのお話の中から、今の世の中との違いや、大変な時代を生き抜いてこられた人たちの苦労を知り、そうした人生の先輩方の苦労や努力に支えられて、今日の私たちの生活があることに気づかせたい。

イ　「ミニ交流活動」

ゲストティーチャーからのお話を基にして、もっと知りたい事や聞きたい事について、夏季休業を利用して、身近なお年寄りから直接お話を伺う機会をもつ。家族や親戚、近所、地域のお年寄りとの自発的な交流を促したい。

ウ　「特別養護老人ホーム（シルク）」への訪問

子供たちは２年前にシルクを訪問した。その時の感想として、「お年寄りと楽しく過ごせてうれしかった。」「ゲームが盛り上がった。」「歌を歌った後、お年寄りが涙を流してよろこんでくれた。」「最初、話しかけるのが少しこわかったけれど、だんだん慣れて話ができた。」などの感想があった。そして、今度訪問する時には・・・、との思いを残しての活動であった。今度は６年生として成長した自分が、どこまでお年寄りの立場になっての交流計画を立て、実践できるか取り組んでいきたい。

エ　各班の追究活動における「人」との交流

「シルクの介護福祉士・栄養士」「役場の福祉課職員」「介護用品製造販売店で働く人」「駅・スーパーなどでお年寄りの事を配慮して働いている人」との交流を通し、お年寄りの生き方や願いに接したり、また施設で働く方の老人福祉に対する願いにも直接ふれたりすることにより、高齢者に対する新たな見方が拓かれ、自分もまた高齢化社会の担い手であることを意識することができると考える。

(2) 「自己の生き方を見つめ直せる児童」について

自分を取り巻く社会は、直接的にも間接的にも、多くの人や地域・自然等の恩恵を受けて成り立っている。それらの事柄に気づき、他を大事にしながら、よりよく生きていく姿勢は大事である。

児童は、これまでのお年寄りに対する気持ちや、接し方について、本活動を通して自分を見つめ直し、これからの自分の生き方（考え、行動）を模索していく。そこで、お年寄りとの交流活動の過程や、活動の節目における振り帰りの活動を大事にしていきたい。さらに自分のお年寄りに対する気持ちや、接し方について、友達の行動や考えに触れることにより、独りよがりな考えでなく、コミュニケーション活動を通して、より客観的に、そして広い視野で自己を見つめることができると考える。本活動でのゲストティーチャーや身近なお年寄り、そして施設での体験活動など、様々な人との出会いの機会を通して、様々な人の生き方や考え方にふれることは、自己の生き方を見つめ直す児童の育成のために意味のあることと考える。また、お年寄りやお年寄りを取り巻く社会について学んでいく中で、感謝の心や敬意の念をキーワードに取り組みを進めていくことは、自己の生き方を見つめ直す上で、大切な学びの姿勢であると考える。

(3) 「福島発ありがとう便」について

「福島発ありがとう便」とは、本校 6 学年の「総合的な学習の時間」の「人間分野」に位置付けられている単元である。本校の「人間分野」の系統性は、3 学年で「弟妹をつくろう」（幼稚園児との交流）、4 学年で「お年寄りと楽しく」、５学年では「働く人の生きる姿に学ぶ」（勤労生産体験を通して）となっている。

本単元における「ありがとう」とは、人生の先輩であり今日の社会を築いてこられたお年寄りに対して、様々な交流や活動を通して感謝と敬意の念を高めながら活動を行っていきたいという願いがある。また、お年寄りの幸せのために仕事をしている人たちや社会のシステムについてにも、感謝の思いを抱いていきたい。そして、活動における表現場面や提案場面を「福島発ありがとう便」と称して発信していく。その第１便から第３便までを以下のような内容に位置付けた。

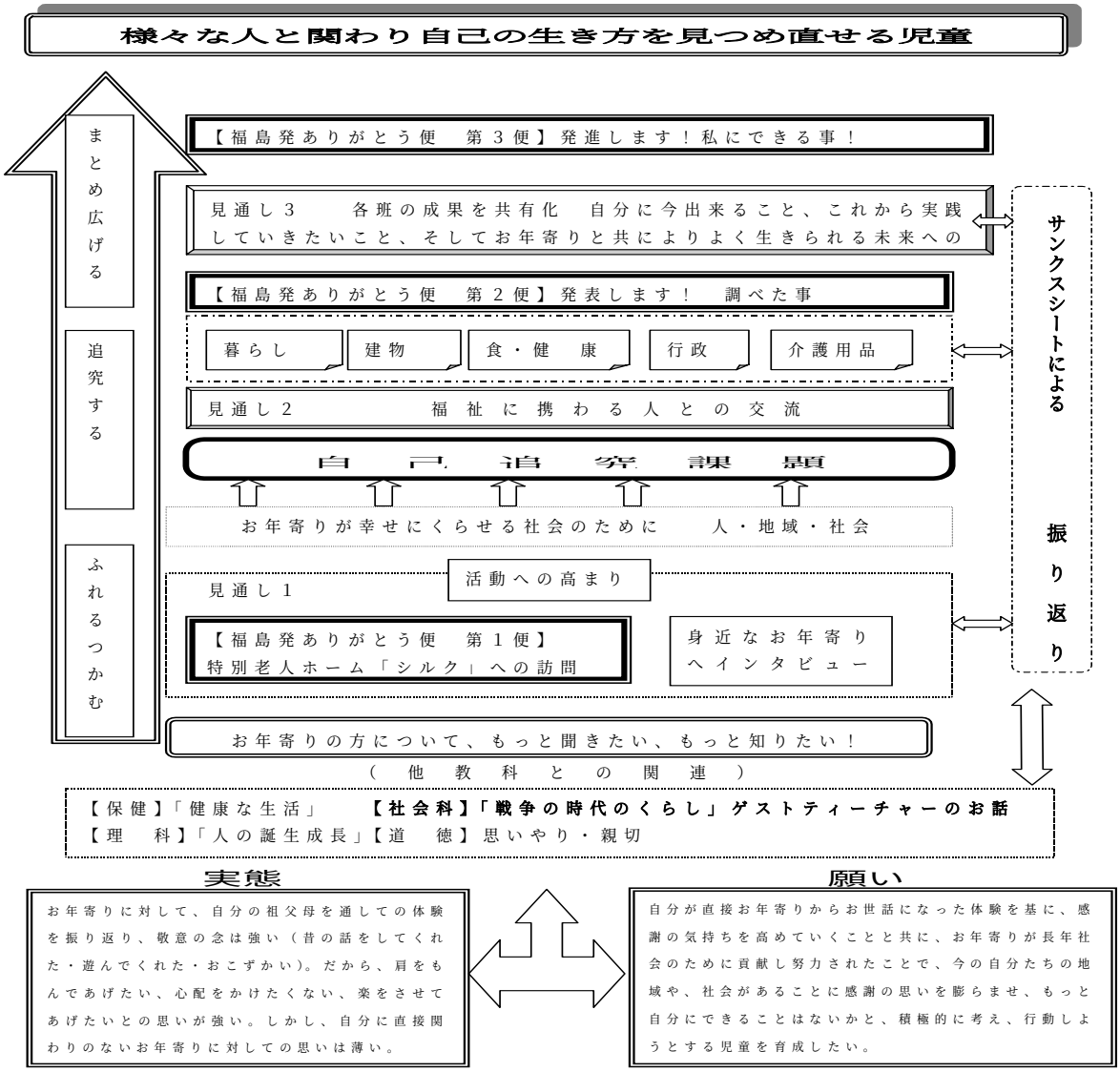
【第１便】・・「シルク」（甘楽町特別養護老人施設）へ訪問する。
子どもたちが、お年寄りに敬意の気持ちをもって、お年寄りに喜んでいただくために訪問する。訪問前に、ゲストティーチャーからのお話や、ミニ交流体験などを通して、お年寄りに対する感謝の念を高め、訪問計画を立てる。「シルク」での活動そのものを「福島発ありがとう便」とする。

【第２便】・・「お年寄りが幸せに暮せる社会ため」の工夫を探り、発表する。
「シルク」訪問後、「お年寄りが幸せに暮せる社会」のために、人、地域、社会が工夫している事は何かを追究し、「福島発ありがとう便」として発表（校内発表）する。

【第３便】・・「お年寄りが幸せに暮せる社会のために」自ら提案する。
各班の追究の内容を共有化し、「お年寄りが幸せに暮せる社会」のために、今の自分にできること、これから実践していきたいこと、そしてお年寄りと共によりよく生きられる未来社会の姿を想像し、発表する。その提案・発信を「福島発ありがとう便」とする。

また、活動の節目において振り返りのシートを「サンクスシート」と名付け、それぞれの活動の中で、プラス思考の振り返りを促した。

（４）全体構想図



２　実践の概要及び結果と考察

(1)　お年寄りへの思いを深め、「お年寄りが幸せに暮せる社会」について、関心を高めていけたか。（見通し１）

ア　実践の概要

他教科（社会科）との関連から、地域在住のM先生（87 歳）より「戦争の時代のくらし」と題して、戦争体験や当時の生活体験をお聞きした。そして、先生のお話を元に、もっと詳しく聞いてみたい事柄を、身近なお年寄りへのインタビュー活動を通し、交流を深めた。また、２年前に訪問をした町内の特別養護老人ホーム「シルク」に訪問した。

イ　結果と考察

子供たちは、M先生のお話を伺い、貧しい時代を生き抜いてこられた当時の人々の「こころ」の部分に触れて、「何も買えなかったのに一生懸命に文句も言わずに働くなんてすごい」「今の自分たちの生活は裕福すぎる。なんか昔の人に悪いと思うから、昔の人に感謝しながら食べたり、遊んだりしようと思います。」といった感想を多くもった。そして、もっと知りたい事柄を身近なお年寄りにじっくりと直接聞いたインタビュー活動の内容では、「戦争の

事」が最も多く、次いで「生活（食べ物）の様子」が多かった。そして、少しでもお年寄りに喜んでいただけるよう班で交流内容を企画し、老人ホームへの訪問を行った。４年生の時の経験を生かし、10 の班（輪投げ・お散歩・紙芝居・かたもみ・紙ずもう班など）に別れて「お年寄りに喜んでもらおう」をテーマに計画した。実際に子供たちは、お年寄りの皆さんに積極的にふれあいながら交流が進められた。

図1　ゲストティーチャーのお話後の振り返り

これら一連の活動の事前事後に行ったアンケートでは、子供たちのお年寄りへの思いは「自分の祖父母以外のお年寄り」に対して「何かの役に立ちたい」が、12%から 65%に増えている結果が出た。これは子供たちが、今の自分たちの生活を昔の時代と比較して考えたり、昔の人の苦労を想像したりして、広くお年寄りに対して敬意の念を深めていけたと共に、直接お年寄りと交流をもったことにより、その思いを高めていけたものと考える。また、人生の先輩であるお年寄りによって、今の時代が築かれていることに多くの感想をもつようになった。

そして、「お年寄りが幸せに暮せる社会にするために」とのテーマのもと、自己の課題としたい内容を全員の児童が、その理由とともに意欲的に設定でき、関心が高まった。

(２)　より意欲的に追究し、「お年寄りが幸せに暮らせる社会」への思いや願いが高まっていったか。（見通し２）

ア　実践の概要

10 の班の各課題に対する解決の方法として、福祉に携わる人との交流の場を積極的に生み出せるように、各班の要望を実現できるよう時間と場面を設定した。図２のように、書籍・ネットの活用と共に、人との交流を介して追究活動を展開した。

班		関わった人	班		関わった人
老人ホーム	5	介護福祉士	ボランティア	5	介護福祉士
甘楽町	3	役場福祉課職員	バリアフリーⅠ	5	町郵便局長
食べ物・健康	5	老人ホーム栄養職員	バリアフリーⅡ	5	高崎駅職員
建物	4	福島駅員　N宅	道具	5	介護用品工場社長
暮らし	6	町の高齢者の方々	車いす	5	介護用品工場社長

図2　　各班と関わった人　　※数字は班の人数

イ　結果と考察

追究活動の中で、各班で福祉に携わる人にお会いしお話を伺う際に、その人の「思い」や「願い」を必ずお聞きするようにした。

道具班では、介護用品製造販売の工場を見学し様々な介護のための道具がある事を知り、社長さんの「お年寄りや体の不自由な人もみんな幸せになって欲しい」との熱い思いに触れた。班の子供たちは当初の計画を変更し、「お年寄りにとって使いにくい道具は何か」また、「どんな道具があったらよいか？」を知るために、「シルク」へ質問ファックスを送り、福祉士さんを通して回答をいただいた。その回答を基に、こんな製品を開発したらどうかと、工場の社長さんに提案をするなど、活動が高まった。

(3)　互いの班の成果をより深く共有化し、自己の生き方を見直していったか。（見通し３）

ア　実践の概要

事前に各班の追究の成果をまとめたサンクスレポートを冊子にまとめ、各班からの報告会を行なった。その際自分たちの班の課題と関わる活動はないかを比較しながら聞き合い、意見を交換した。その後、各人が①自分に今出来ること、②これから実践していきたいこと、

そして③お年寄りと共によりよく生きられる未来社会を想像すること、の３点において記述をしまとめとした。

イ　結果と考察

発表の場だけの各班からの報告でなく、事前に成果をまとめた「サンクスレポート」を読み、追究内容の成果を知ることにより、自分たちの班との関連や報告会の際に質問したいことをまとめておき、各自がめあてをもって報告を聞くことができた。そして、新たな提案に役立てた。

車椅子　班	車椅子の種類、値段、また車椅子に乗っている人がどんなに大変かということがわかった。
バリアフリー班	郵便局に車椅子の人が来るとドアのスイッチを操作してくれたり、机も出してくれたりするので、安心してゆけるなぁと思った。高崎駅のエスカレーターが三段分平らになるとは思わなかった。実際に行って確かめて見ることが大切だと思った。設備にはお金がかかる。
老人ホーム　班	軽費老人ホームが増えればいい。介護士の仕事の苦労がわかった。
甘楽町　　班	町でのサービスがいろいろあることを知った。町民の願いにこたえようとしている。

図３　A君（建物班）の各班から報告を聞いた後の各班への感想

① お年寄りにあいさつをしたり、優しく接してあげたりする。車椅子を押してあげる。役場などにバリアフリーをもっと増やしてほしいとお願いする。
② お年寄りのために身のまわりのお世話などのボランティアをする。
③ お年寄り（体の不自由な人）のための設備を買う時は、金額が安くなる。また、子供も大人もお年よりも体の不自由な人も、同じ立場で同じ物を使うことができる「ユニバーサルデザイン」の道具が多くあればいいと思う。お年寄りの人が「やればできる」という強い心を持って暮らすことができると思う。

図４　A君の提案

建物班のＡ君は、他の班の発表を参考にして（図３）自分の提案をまとめた（図４）。建物のバリアフリーに視点をあてていたＡ君が、他の班の活動内容を理解するに従い、自分たちの活動内容に留まらずに、他の班の活動内容とも関連付けながら提案することができた。

また、老人ホームの介護士の方から、道具班がアドバイスをいただいた「ユニバーサルデザイン」についての考え方の視点は、他の班の子供たちが自らの活動内容と照らし合わせ、発展的な提案の一助となった。自分の班での活動の深まりと、他の班の活動内容の効果的な共有により、自己の生き方を見つめ直す有効な資料となった。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

１　研究のまとめ

自己の生き方を見つめ直すために、他の人の生き方にふれる事を大切にしながら活動を行ってきた。子供たちは、直接お年寄りからお話を聞いたり、老人ホームで交流を深めたりする活動で、自分の祖父母以外のお年寄りに対する敬意の念を強めていけた。そして、更に追究活動において、老人福祉に携わる様々な人たちとのふれあいを通して、その生き様の一端に触れられたことは、追究活動への意欲を高めていけたとともに、これまでの自分の生き方（考え方や行動）を見つめ直す上で、大いに有効であった。自己の生き方の見直しは、人の生き様にふれてこそ揺さぶられるものと実感した。また、「福島発ありがとう便」と称し、感謝の念を大切にした活動を貫いたことは、今後の児童の学びの姿勢づくりにも役立った。

２　今後の課題

今回の活動は「お年寄り」との交流を通して、「お年寄りの幸せ」というという視点であったが、お年寄りを含む「全ての立場の人たちの幸せ」という視点で、今後、活動の範囲をより広げていく必要があると感じる。

〈参考文献〉

・中野　重人・廣嶋　憲一郎　編著　『自ら学ぶ総合的な学習の時間のつくり方』東洋館出版